

第15話 湊川の戦

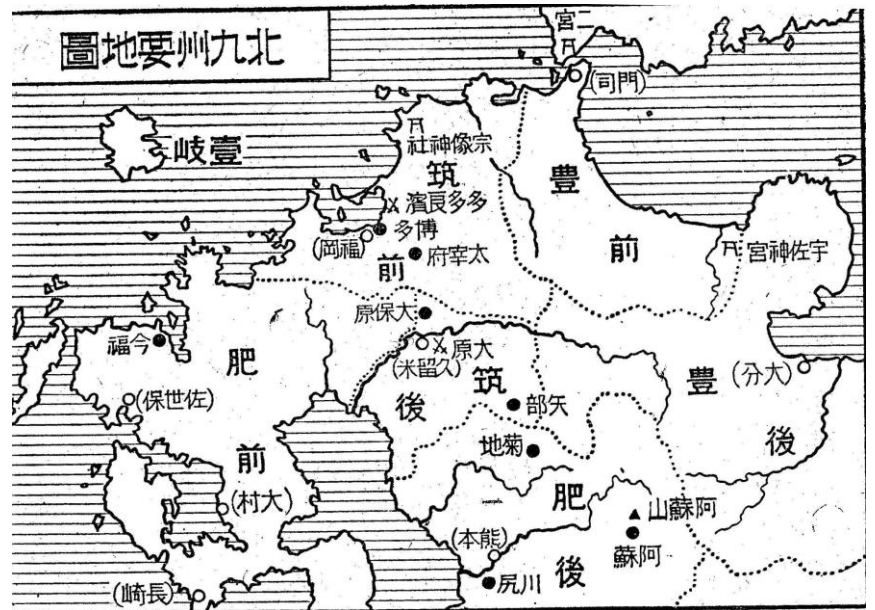
勤王軍の菊池氏が多々良濱の戦いに敗れたので、尊氏の勢いが大宰府に大いに振る。

やがて彼が九州、四国、中国の兵を合わせて東上すると、官軍は兵庫にこれを防ぐが敗れ、楠木正成は湊川で戦死する。尊氏の入京。

さて足利尊氏は2月19日に長門の一の宮に詣で、20日に赤間関に着いた。九州の豪族はこれを見て、方々から来て集まった。25日には大宰府の小式貞常の嫡子頼尚兄弟が一族郎等500騎を率いてこれを迎えたので、尊氏は、29日に赤間関から海路を筑前の芦屋浦に着いた。

肥後の菊池氏

この頃、九州に有名な勤王家がいた。肥後(熊本県)の菊池氏です。曩に後醍醐天皇が隠岐においでの際に、菊池武時が勤王の軍を起こして九州探題の北條英時を討とうとしたという事は前に述べましたが、その時、一緒に攻める筈の小式貞常らが途中で志を変じて、却って英時を援けたために、



武時は終に破れ、子の武重に後の事を言い含めて国に還させて、自分は勇ましく戦死したのです。

武重は父の志を継いで官軍に属して、新田義貞が箱根に戦った時には、その先登となって足利直義の軍を破りました。その後も常に新田義貞の軍に従い、足利尊氏が京都に攻め入った時には、天皇の御輿を護って叡山にお供した。尊氏が九州に走った後も、彼は義貞の軍に加わって忠勤を励んでいました。

多々良濱の戦い

肥後には、この時、弟の武敏がいました。彼は小式貞常がその子らに兵を授けて尊氏を迎えたと聞くと、彼らがまだ帰り着く前に太宰府を陥れようと、武敏は延元元年2月29日、急に3,000騎の兵を率いて阿蘇惟直らと共に貞常を攻めた。貞常は尊氏を迎えてから、菊池氏と決戦するつもりでいたが、先んじられたために遂に敗れて、自殺した。菊池武敏は勢いに乗じて兵を進め、3月2日に博多附近の多々良濱に尊氏を迎え撃って、一旦は大いにこれを破ったのですが、直義が死を決して戦ったので、菊池軍は次第に圧迫され、その上、松浦党が敵に降参したので、ついに敗れて筑後に退いた。

勝誇った直義は直ちに大宰府に入り、次いで尊氏もまた大宰府に入った。実にこの一戦は、九州に於ける官軍と賊軍との運命を決する大事な戦いだったのですが、惜しいかな、菊池軍は数倍の大軍を以つ

第15話 湊川の戦

としても敗れたので、ついに尊氏の運を九州に開かせる基となりました。

尊氏は大宰府に入ると、勝ちに乗じて全九州をその勢力の下に従えようと、直ちに兵を遣わして菊池を迫撃すると共に、近国の豪族に書面を送って、その尊氏方への来会を求めた。こうしてその勢いが大宰府に大いに振ると、官軍である菊池氏、阿蘇氏、及び日向の肝付氏らに対する備えの兵を後に駐めて、尊氏は弟の直義と共に東上の準備にかかった。

新田義貞、白旗城を囲む

一方、新田義貞は、足利尊氏が九州に走った後に、更に尊氏追討の勅を受けて京都を発して、60,000余騎の兵を率いて赤松則村を播磨の白旗城に囲んだ。白旗城は、赤松氏の本城であり、中国への往還に当たった要害の地です。赤松氏が足利氏に属してこの城を守っている間は、尊氏が東上の通路は安全なわけですから、義貞は先づこの城を抜いて後に西下しようとしたのです。けれども赤松氏もまた、尊氏が東上するまでは官軍をここに食い止めようとして死守したので、容易には陥らない。義貞は延元元年の三月末から攻撃にかかり、後にはこれを兵糧攻めにすると共に、別に弟の脇屋義助らに兵を授けて、備前、備中、美作方面の諸城を攻めさせた。

かくして官軍の勢いが大いに中国に振ったので、則村は密かに急使を尊氏に送って、援けを求めた。

足利尊氏の東上

既に出発の準備をしていた尊氏は、これを聞くと一層東上を急いで、早くも4月3日には大宰府を出発した。5月1日に安芸の厳島に詣で、5日の夕べに、更に進んで備後(広島県東部)の鞆の港に着くと、ここで軍議を開いて、尊氏は高師直と共に海路を取り、弟の直義は師直の弟の師泰らと共に陸路を進むことにした。九州、四国、中国の将士が殆ど皆尊氏に従ったので、その勢いは頗る盛んで、尊氏の率いた兵船は7,000余艘、直義の率いた軍勢は200,000騎と号した。

5月10日に海陸同時に鞆の港を立って、堂々と東に進んだ。

新田義貞、兵庫に退く

この時、官軍では、新田義貞の武将の大井田氏経が備中の福山城(総社市)を占領して守っていたが、16日に、直義の大軍に忽ち攻め落とされて、氏経は備前に遁れた。義貞の弟脇屋義助は備前の三石城を囲んでいたが、彼もまた抵抗が出来ないので、囲みを解いて退いた。

総大将の義貞もついに18日に赤松則村が守る白旗城の囲みを解いて、23日に兵庫に退いて陣取ったが、これと共に使いを京都に馳せて、事の次第を朝廷に申し上げた。朝廷では大いに驚かれ、楠木正成をお召しになって、急ぎ兵庫に下って、義貞に力を合わせて合戦をするようにと言われた。

正成の献策

楠木正成は畏まって、

「今度の賊軍は定めて大軍で在りましょう。身方の疲れた小勢で、勢いに乗った敵の大群と、普通の

第15話 湊川の戦

合戦をしたのでは身方は必ず負けると思いますから、一先づ新田殿をも京都にお召しになって、前の如く叡山に御臨幸になるのがよいとぞんじます。正成も河内に帰って、機内の軍勢を以って淀川尻を差し塞ぎ、両方から敵の糧道を絶ちましたならば、敵は次第に疲れて軍勢が落ち、身方は日に日に馳せ集まって多くなりましょう。その時になって、新田殿は叡山から押し寄せられ、正成は河内から攻め上りましたならば朝敵を一時に滅ぼすことが出来ようかとぞんじます。新田殿も定めてそうは思いながら、途で一戦もしないのは卑怯だと人に思われるのを恥じて兵庫に支えているのだとぞんじます。およそ合戦は、一時の事はともかく、最後の勝利を占めるのが肝要です、よくよくお考えの上、お決め下さるように願います」と申し上げた。

正成の策が用いられず

多くの公卿は、戦争の事は武臣にお委せなさるのがよろしいといったが、藤原清忠という人が、「正成の申すことには一理はありますが、征伐に向った者がまだ一戦もしないうちに、帝都を捨てて、1年の内に2度までも叡山に御臨幸なさるといふのは、第一、朝廷の御威光にもかかわり、又、官軍の道も失うことであります。たとえ尊氏が九州の軍勢を率いて来るといっても、去年の関東勢ほどではありませんまい。それに身方は小勢で、いつも敵の大軍を攻め破っていますが、これは全く天皇の御徳によるのでありますから、今度も帝都の外で決戦して、敵を滅ぼす事は何のむづかしいことがありましょう。正成はやはり兵庫にお下しなさるのがよろしいと存じます」と申し上げたので、天皇はその言葉を用いられた。

桜井駅の訣別

正成はこの上は仕方ないと、勅りを奉じて兵庫に向ったが、これを最後の合戦と思ったので、嫡子正行が今年十一才で一緒にいたのを、後に志を継がせるためにと、摂津の桜井駅（大阪府北東部）から河内に帰した。有名な楠公父子桜井駅の訣別がこれで、この時、正成は、「自分が討ち死にしたら、天下は必ず足利尊氏の世となるであろうが、一旦の命を助かるために、多年の忠烈を失って、降参するようなことがあってはならぬぞ。一族若党の一人でも死に残っている間は、金剛山の辺りに引き籠って、敵を悩まし、君に忠義を尽くし奉れ。これが汝の第一の孝行であるぞ」と教訓を残して、泣く泣く東と西とに別れたということです。今はその地に記念の碑を建てて、この美談を永く後世に伝えていきます。

湊川の戦い

かくて楠木正成は700騎の兵を率いて兵庫に進み、新田義貞と力を協せて敵の来るのを待っていた。時は延元元年5月25日、尊氏の兵船は須磨の沖から凡そ60kmの間、全く水の面もみせないほどに、船艦を並べて漕ぎ寄せる。直義の陸兵は、諸家の旗を5~600旒も吹き靡かせて、雲霞の如くに山陽道を寄せ懸ける。

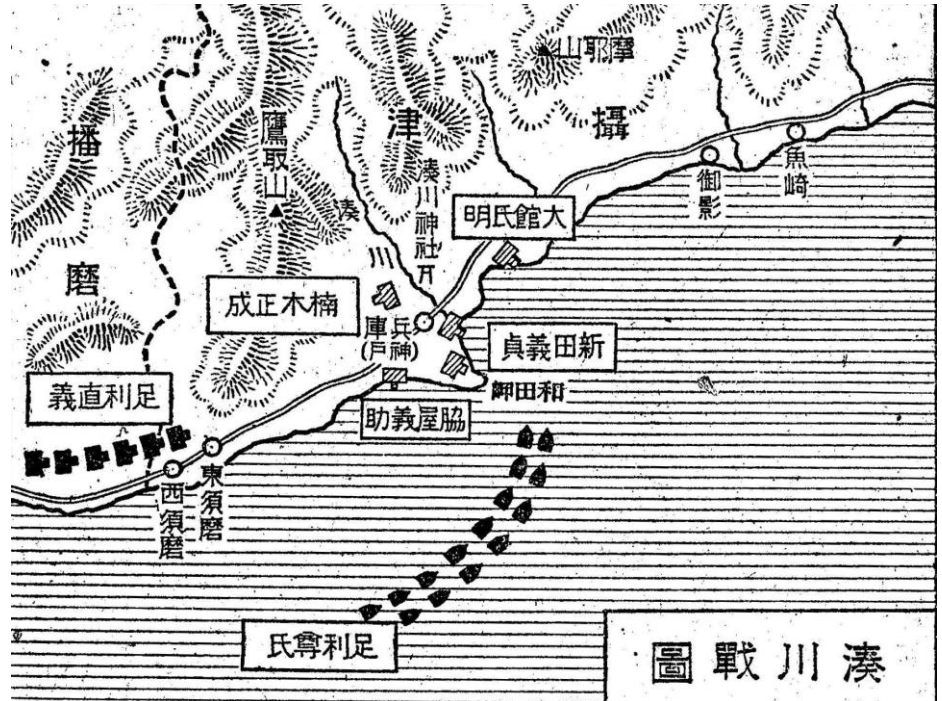
海上の兵船も、陸上の軍勢も、思ったよりも夥しく、聞いたよりも猶多かったので、官軍は身方の

第15話 湊川の戦

小勢に比べて呆れて見えたが、総大将の義貞も正成も、もとより大敵を恐れず、小敵をあなどらない名将ですから、少しも気を落とした様子はなくて静かに身方の手分けをした。脇屋義助は5,000余騎を以って経島を固め、大館氏明は3,000余騎で南の濱に陣取った。海上の敵を上陸させないための陸路の敵には楠木正成が向ったが、彼はわざと他の軍勢をば交えずに、部下の700騎だけで湊川の西の宿に控えていた。総大将の義貞は、25,000騎を率いて和田岬に本陣を構え、身方の諸軍に命を下していた。

敵の水軍

ところが、敵の水軍は、初め経島に上陸しかけたが、真っ先の200余人が忽ち官軍に1人も残らず討ち取られると、更に先へと進んで和田岬を東へ堂々と通り過ぎた。紺部の濱—今の神戸—から上陸しようとしたのです。義貞、義助、氏明等の軍勢は、その上陸を防ごうとし



て、漕ぎ行く船に随って、汀を東に退いた。海と陸との両軍がこうして互いに睨み合いつつ次第に遠くの汀へ去ると、いつか義貞と正成の間が遠く隔たって、兵庫の船着には支える兵もなくなった。その時、敵の残りの水軍が一時にどつと和田岬に漕ぎ寄せて、上陸したのです。

正成の奮戦

楠木正成はこれを見て、弟の正季に言った。「敵を前後に受けて、身方は遠く隔たった。今は遁れぬところと思うぞ、先づ前の敵を一散らし追い捲って、後ろの敵と戦おう」と、則ち700余騎を前後に立てて、直義の大軍の中に駆け入った。足利直義の軍勢は、菊水の旗を見て、よき敵だと思ったので、取り籠めてこれを討とうとしたが、もとより知勇兼備の名将が、秘術を尽して奮戦するのですから、その勢いは凄まじい。

縦に横に、破って通り、追い靡け、正成と正季と、七たび会って七たび別れ、偏に直義を目ざして討とうとしたので、ついに直義の数十万騎が楠木の700騎に駆け散らされて、須磨の方に引き返した。この時、直義の馬は鏃を踏んで蹄を傷つけ、右の足をびっこにしたので、楠木勢に追い詰められて、すでに討たれたかとまで思われたが、彼の悪運が強かったのか、馳せつけた家来が奮闘している間に、直義は辛くも馬を乗り換えて逃げ去った。

尊氏はこのさまを見て、新手を入れ替えて直義を討たすなと命を下すと、高師直以下の人々が、6,000騎で湊川の東に駆け出で、楠木勢の後ろからこれを取巻いた。正成兄弟は又取って返してこの敵

第15話 湊川の戦

と奮戦したが、6 時間に 16 度まで戦うと、部下の兵も次第に滅びて、後は僅かに 73 騎になった。

時は陰暦の 5 月 25 日で、今の太陽暦の 7 月 12 日に当る。暑い夏の真っ最中に、しかも 6 時間に余る苦戦をしたのですから、さすがの正成もどんなにか疲れ果てた事だったでしょう。

楠木正成の戦死

今はこれまでと諦めて、湊川の北に当って、一村の民家のあった中へ走り入って、腹を切らんが為に鎧を脱いでわが身を見るに、切り創を 11 ケ所までも受けていた。この外 72 人の者共も、皆 5 ケ所、3 ケ所の創を受けていない者はいなかった。楠木の一族が十三人、随う兵が 60 余人、六間の座敷に 2 列に並んで一度に腹を切ったということです。

この時、正成は弟の正季に向って、「何か最後の願いはないか？」と問うと、正季はからからと笑って、「七度までも同じ人間に生まれて、朝敵を滅ぼしたいと思います」といったので、正成はさも嬉しげな様子で、「わしもそう思うのだ。さらば同じく



神戸 湊川神社 楠木正成の墓

人間に生まれ替わって朝敵を滅ぼそう」と互いに誓い、兄弟共に刺し違えて死んだ。正成は時に 43 才でした。やがてその首は賊軍の手に渡ったが、逆賊の尊氏もさすがに正成の忠義には感じていたので、これを河内の正行の許に送った。

湊川神社

後醍醐天皇は正成の戦死を聞かれると、大いに歎かれたが、せめては笠置以来の忠功を賞するためにと、やがて正三位左近衛中将を贈られた。なお、後に明治天皇は正成に正一位をお贈りになり、大正天皇は正季に従三位を贈られた。

今、神戸市にある別格官幣大社湊川神社は、正成を祀った社で、その境内に在る正成の墓には、有名な「嗚呼忠臣楠子之墓」の石碑が建っている。これは水戸の徳川光圀が、正成の死後 350 年にその忠義を永久に世に表わすために建てたものであります。

新田義貞の苦戦

さて、正成が既に戦死すると、尊氏は直義の軍を合わせて新田義貞の軍を追撃して来た。義貞は

第15話 湊川の戦

この時、西宮附近で水軍の先鋒であった細川定禪の軍と戦っていたのですが、これを見ると、兵を旋して生田森の附近に敵を迎えて大いに戦った。けれども、勝ち誇った数十万の大軍に取り囲まれた僅かの兵で、どうしてこれを拒ぎきることが出来ましようか。

苦戦に苦戦をしながら退却するうちに、運悪くもその馬を射倒された。義貞は、とある塚の上に下り立って、ただ一人、左右の手に抜き持った二振りの名刀を揮って、敵の射かける矢をば切って落として拒いでいたが、危険は刻々と迫って来た。

その折から、家来の小山田高家が遥かの山の上からこれを見て、まっしぐらに駆け付けると、自分の馬に義貞を乗せて自分は徒立となり、奮戦して遂に討たれた。その間に、義貞は危ういところのがれたのです。その地は今も摂津の御影町の附近に求女塚として残っています。

小山田高家

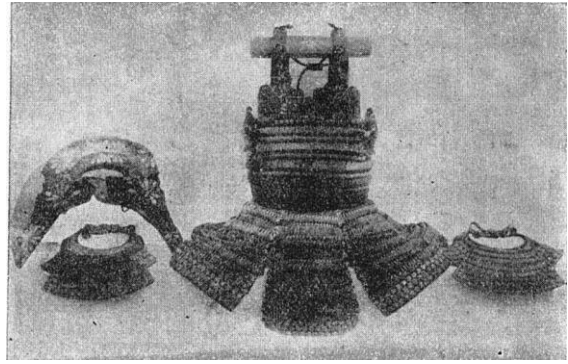
序に述べますが、この時、小山田高家が義貞の命に代わった事に就いては、武士の情愛を語る1つの美談が伝えられています。

これより先、新田義貞が播磨の赤松則村を播磨の白旗城に囲んだ時に、兵の多い割合には兵糧が乏しかった。嚴重な軍法を設けなければ兵士の狼藉が絶えまいからと、一粒をも刈取り、一軒の家をも荒らした者は、速やかに死刑にするぞという掟を書いた高札を道の辻々に立てさせた。

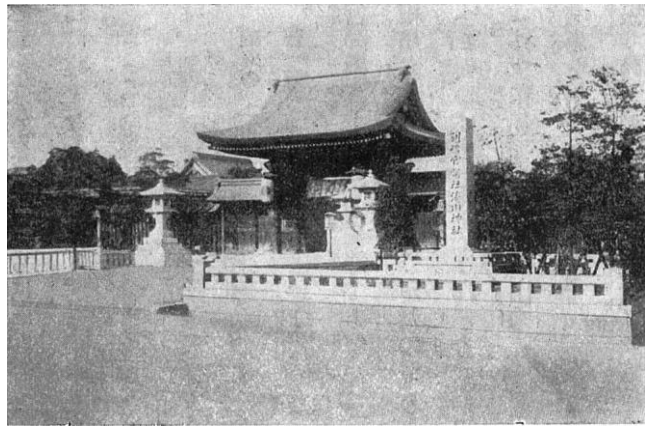
そのおかげで農民は耕作をつづけ、商人は商売をしっかりと営んでいたのに、この小山田高家は、敵陣の近くに行つて、青麦を刈取らせて、馬に負わせて帰って来た。取り締まりの役人がこれを見て、直に高家と呼び寄せ、法を犯したので止むなく彼を死刑にしようとした。

義貞がこれを知り、「青麦ぐらいに命を棄てようとする筈はない。そこを敵陣だと思いがえたのか、さもなければ兵糧が尽きたのかも知れない。彼の陣屋を調べてみよ」と、使いを遣つて調べさせると、馬や武器のようなものはすべて立派に整っていたが、食べ物の類は一粒もなかった。

使いが帰つてこの由をいうと、義貞は大いに恥じた様子で、「高家が法を犯したのは、戦いを大切に思うあまりに罪を忘れたのに相違ない、士卒を飢えさせたのはこの大将の恥である。勇士を失うものいけないが、法を乱すのもいけない」と、麦の主には着物二重ねを与えてこれを償い、高家には兵糧10石を与えて帰らせた。高家は深くこの情けに感じて、さてこそ求女塚の危急の際に、御恩返しはこの



楠木正成の用いた鎧と鞍



神戸 湊川神社

第15話 湊川の戦

よしさだ いのち か う じに
時と、義貞の命に代わって討ち死したのであります。

ごだいご えいざん せんこう 後醍醐天皇、叡山に遷幸

よしさだ あや たかいえ すく ざんべい からく たんば ち へ
新田義貞は危ういことを高家に救われ、残兵5,000を率いて、辛くも丹波路を経て京都に帰った。

5月26日の事です。京都の驚きと騒ぎは一通りではなかった。翌27日、天皇は神器を奉じて再び

えいざん ぎょうこう こうきょ よしさだ よしすけ うつのみやきみつな ち
叡山に行幸され、皇居を東坂本に定められた。義貞、義助を始めとして、新田一族、宇都宮公綱、千

ばさだたね きくち たけしげ どいみちます とくのうみちつな なわながとし まも
葉貞胤、菊池武重、土居道増、得能通綱、名和長年らの武士がお護り申し上げた。

この時、予ねて尊氏に義貞追討の院宣を与えた光厳院は、他の皇族方とご一緒に一旦叡山へと京都
をお出になったが、途中からご病氣と称して引返し、6月1日、尊氏が山崎に陣して次いで八幡に本営
を移すに及んで、御弟の豊仁親王と共に尊氏の陣に迎えられた。

ろくじょうただあき せんし 六條忠顕の戦死

せんぼう はい ただよし にゆうきょう たかうじ しばら やはた
足利勢の先鋒は早くも26日に京都に入り、29日に直義の軍も入京した。尊氏はなお暫く八幡に

とど ま ただよし こうげき
留まって、先づ直義らに叡山を攻撃させた。この攻撃は6月5日から始まって、約半月も続いた。

かんぐん ふせ かえ よせて
賊軍は三方から大兵を以って押し寄せて、一挙に攻め落そうとしたが、官軍がよく防いだので、却って寄手

ほう くせん おちい げきせん せんがい
の方がしばしば苦戦に陥ったくらいでした。けれども、たびたびの激戦に官軍の損害も多く、6月7日

ちゅうこう こうしん ろくじょうただあき せんし
の戦いには中興の功臣である六條忠顕も戦死した。

たかうじ なかなかさか こうごんいん とうじ ほんえい
尊氏は官軍の勢いの中々盛んなのを見ると、6月14日に光厳院を奉じて京都に入り、東寺に本営を

きせい そ あ いったい はいご おそ
移して身方に氣勢を添えた。けれどもこの時、宇治の方面に在った官軍の一隊が彼の背後を襲おうとし

そな
ていたので、先づこれに備えているうちに、叡山の方面では、6月20日の戦いに足利軍が大いに敗れて、

たかうじ
ついに尊氏は京都を退いた。

なわながとし せんし 名和長年の戦死

かんぐん か じょう かいふく おそ かけち
官軍は勝ちに乗じて京都を回復しようと、6月30日に大挙して京都を襲い、敵の先陣を駆散らし

すす どうじ たかうじ ほんえい せま ふせ たたか
て、進んで東寺の尊氏の本営にまで迫っていたが、足利軍がよく拒ぎ戦ったので、ついには官軍は大い

しりぞ よしさだ ほそかわちようぜん ついげき ほんどん あぶ
に敗れて退いた。この時、義貞は細川定禅に追撃されて、一時は殆ど危なかったが、部下の将士の

たたか よ わづ のが なわながとし
決死の戦いに依って僅かに遁れた。しかし、名和長年はついにこの日の戦いに討ち死にをした。

ながとし せんじょうざん むか
長年は船上山に天皇を迎えしてからここに4

年、常に天皇をお護りしてよく勤王の志を遂げ

たのです。その墓は今も京都に在ります。なお、

めいじ ながとし
後に明治天皇は長年に従三位を贈られた。

なわ べっかくかんべいしゃ なわじんじゃ
今、伯耆国名和村に在る別格官幣社名和神社は

ながとし まつ やしろ ぐうじ ながとし しそん
長年を祀った社で、その宮司は長年の子孫である

なわだんしゃく だいだい
名和男爵（訳注：戦前の位）が代々つとめている。



鳥取県

名和神社

第15話 湊川の戦

足利尊氏の京都占領

さて、その後の官軍は暫く叡山（比叡山）に據ってその勢いを養っていましたが、賊軍も敢えて攻め寄せることをしなかった。互いに打ち勝つ見込みが立たなかったのでしょうか。

ここに至って思い出すのは、先に正成が立てた計略です。若しこの時、正成が生きて河内にいて敵の糧道を絶ったら、どうだったでしょう？ 賊軍は食物のないのに困って、次第にその軍兵は逃げ落ちたでしょうから、実際、正成の言ったように、尊氏らを滅ぼすこの難しゅうなかつたに違ひありません。

しかし、事実はこれに反していました。尊氏が京都を占領したという事が諸国に知れると、地方の武士の多くはますます賊軍に応じたので、官軍の勢いはいよいよ衰えた。

京都に在っては、7月から8月にかけて幾度かの小競り合いがあつて、両軍ともに勝ったり負けたりしていたのですが、8月28日に、義貞は最後の決戦を試みるために京都を襲つた。またまた、高師直に大いに破られて退いてからは、叡山の官軍もまた次第に勢いが無くなりました。

（第15話 湊川の戦い 終わり。次は前頁に戻り、第16話 吉野の朝廷へ）